

事業報告書（令和7年度）

事業名 新しい風 ～戯曲と触れ合う・戯曲を書こう～

団体名 Cube 担当者名 景山 圭祐

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、講師、参加対象者、人数、内容等）

本事業は、戯曲という対話を基盤とする文学形式を通じて、市民が主体的に社会や他者との関係を見つめ直す機会を創出することを目的に実施した。文学鑑賞にとどまらず、創作という実践を通して学びを深める構成とし、「読む」と「書く」を往還する学習プロセスを設計した点が本事業の大きな特徴である。

開催形式は、全講座を Zoom によるオンライン開催とした。オンライン形式を採用することで、会場費や移動負担を軽減し、参加費を抑えながら実施することが可能となった。また、地理的条件に左右されず参加できる環境を整えることで、多様な背景を持つ参加者が集う機会となった。

講師には、劇作家・演出家として国内外で活動し、創作指導経験も豊富な大迫旭洋（おおさこ・てるひろ）氏（プレグラ代表）を招聘した。創作現場の第一線で活動する講師から直接学ぶことで、参加者が戯曲をより実践的かつ具体的に理解できる体制を整えた。

講座は二部構成とした。

第一部は「古典を読み解く講座」である。

2025年12月20日に「古典劇編」（参加者4名）、12月29日に「現代・不条理劇編」（参加者4名）を実施した。古典劇編では、チャーホフなどの作品を題材に、物語構造、人物関係、台詞の含意、沈黙の意味、社会背景との関連性などを多角的に分析した。現代・不条理劇編では、合理性の崩壊や価値観の揺らぎを扱う作品を通して、現代社会における孤立やコミュニケーションの断絶といったテーマを考察した。

講義形式に加え、参加者が自らの感じた点を共有し合う対話型運営を取り入れ、「なぜこの作品は今も上演され続けているのか」「現代社会にどう響くのか」という問いを中心に議論を行った。単なる知識習得ではなく、作品を通して社会を読み解く視点を養う内容とした。

(様式第8号)

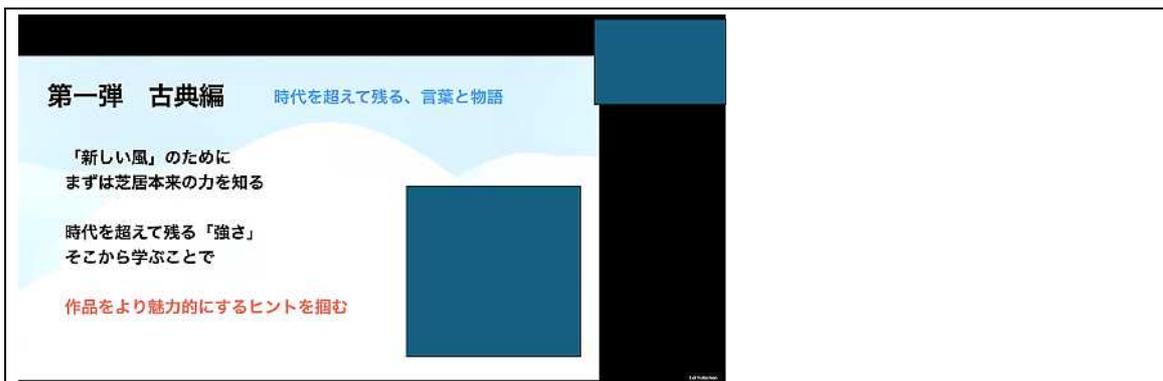


写真 1)



写真 2)



写真 3)

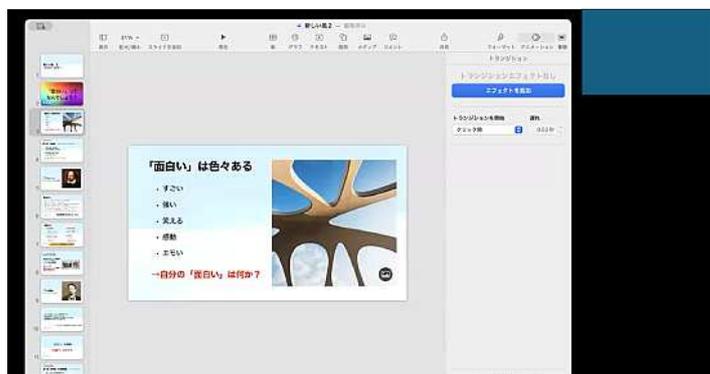


写真 4)

写真 1) ~ 写真 4) 古典戯曲を読み解く講座の風景

第二部は、2026年1月から2月にかけて全3回実施した「戯曲創作講座」である。参加人数は5名とし、少人数制によるきめ細やかな指導を行った。参加者は戯曲創作に取り組み、テーマ設定、構成づくり、人物設定、対話の構築方法などを段階的に学んだ。

各回では、講師による具体的なアドバイスと参加者同士の相互講評を行い、創作の過程を共有した。最終回では、参加者が執筆した作品を声に出して読み合い、戯曲が持つ上演性・対話性を体感する時間を設けた。参加者からは「とても面白かった」「続きを読みたい」といった感想が寄せられ、創作を通じた達成感と他者との共有体験が生まれた。

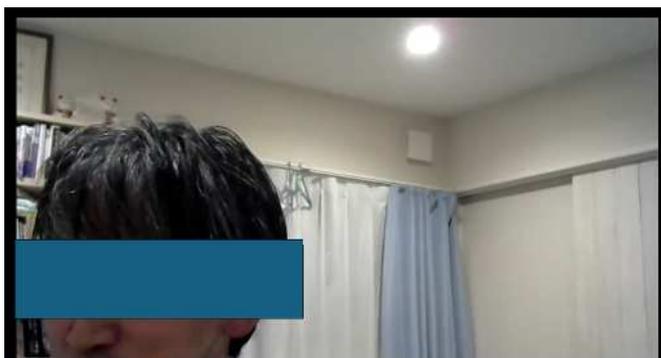


写真5) 創作戯曲講座参加者の一人

本活動は、文学を「読む対象」から「社会と対話する手段」へと位置づけ直す機会となった。

2. ESDの視点

①事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

本事業を通して参加者に生じた最も顕著な変容は、「物語を消費する存在」から「物語を創造し社会へ発信する存在」への意識の転換である。戯曲という形式は、登場人物同士の対話を通して世界観や社会構造を浮かび上がらせる文学である。そのため、創作の過程では必然的に「他者の立場を想像する力」「対立や葛藤をどう乗り越えるかを考える力」が求められる。

参加者は創作を進める中で、自分とは異なる価値観を持つ人物を描く難しさと重要性を実感した。この体験は、ESDが掲げる「多様性の尊重」「包摂的社会の構築」という理念と深く結びついている。実際に、作品の中には世代間の断絶、孤立、コミュニケーション不全など、現代社会の課題をテーマにしたものが多く見られた。創作を通じて社会課題を内省し、自分なりの問いを立てる姿勢が育まれた点は大きな成果である。

また、古典戯曲を学ぶ中で、「人間の抱える問題は時代を超えて連続している」という歴史的視座が共有された。過去の作品が現代にも響く理由を考察することは、持続可能性の観

点から社会を俯瞰する視点を養う機会となった。短期的視野ではなく、時間軸を拡張して物事を捉える力は、ESDにおける重要な能力である。

さらに、「おもしろい作品とは何か」という問いをめぐる対話は、価値観の多様性を可視化した。同じ作品を読んでも評価が分かれる経験は、唯一の正解が存在しないことを学ぶ契機となった。これは、合意形成や協働が求められる持続可能な社会において不可欠な態度形成につながるものである。

②どのように学び合いを取り入れたか

本講座では、講師主導型の一方的な知識伝達ではなく、参加者同士が相互に影響し合う学習構造を重視した。古典講座では、作品分析の後に必ずディスカッションの時間を設け、個々の感じ方や解釈を共有した。発言の機会を平等に保障することで、多様な視点が尊重される場づくりを行った。

創作講座では、相互講評を中心に据えた。作品に対する感想を述べる際には、「良い・悪い」という評価に留まらず、「どのような点が印象に残ったか」「どの対話が心に響いたか」といった具体的な観点で意見を交換した。これにより、批判ではなく建設的な対話が成立した。

オンライン環境であっても、心理的安全性を確保するために、否定的言動を避けるルールを共有し、安心して意見を述べられる雰囲気づくりを徹底した。結果として、参加者同士に信頼関係が生まれ、継続的な学習共同体の萌芽が形成された。

③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

本事業では、「知識の理解」と「創作という実践」を段階的に接続した。古典講座で学んだ構造や人物造形の技法を、創作講座で具体的に応用する構成としたことで、理論と実践が分断されない学習設計となった。

また、作品を声に出して読む時間を設けたことは、学びを社会的経験へと転換する重要な仕掛けであった。戯曲は他者の声を通じて立ち上がる文学であり、読み合いの体験は、自己表現が他者との関係性の中で意味を持つことを実感させた。この体験は、対話的社会を築く上での基礎的能力を養う実践でもあった。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

本事業は、計画段階で掲げた三つの目標、すなわち①古典理解の深化、②創作実践の実現、③地域文化基盤の醸成を概ね達成した。

第一に、参加者全員が創作に取り組み、具体的な作品または構想を完成させた点は象徴的成果である。特に、初心者が「自分にも書ける」という実感を得たことは、創作活動への

心理的障壁を下げる効果を持った。

第二に、作品の読み合いを通じて批評的対話が生まれた。「なぜこの場面が印象的なのか」「なぜ続きが読みたくなるのか」といった問いを共有することで、感覚的評価から論理的考察へと深化した。この過程は、思考力と対話力の向上につながった。

第三に、参加者から継続開催を望む声が寄せられたことは、本事業が一過性ではなく、持続的学習への動機を生み出した証拠である。創作を通じた学びの場が地域に求められていることが明らかとなった。

加えて、オンライン開催により環境負荷を抑えつつ文化活動を実施できたことは、持続可能な事業運営モデルの一例となった。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

今後の課題は、継続的な運営体制の構築である。安定的な財源確保と、参加しやすい料金設定の両立が求められる。行政や教育機関との連携を強化し、地域全体で支える仕組みづくりが必要である。

展望としては、対象年齢の拡大がある。小学生や中高生を対象としたプログラムを開発することで、早期から対話力や想像力を育む教育的実践が可能となる。物語創作は、他者理解と共感を育む有効な手段であり、ESD の教育的枠組みと親和性が高い。

さらに、成果発表の場を地域社会に開くことで、創作と社会を循環させる構造を築きたい。リーディング公演や公開発表会は、地域住民との対話の場となり、文化的包摂を促進する。

戯曲は対話の文学である。対話の文化を地域に根付かせることは、持続可能な社会の基盤を育む営みである。本事業はその第一歩であり、今後も岡山地域における ESD 実践の一環として発展させていきたい。